



ある負傷頻発選手の負傷における心理的背景に関する事例報告

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2012-11-07 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 吉村, 功 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.32150/00004272

ある負傷頻発選手の負傷における心理的背景に関する事例報告

吉 村 功

北海道教育大学函館校保健体育教室

The Psychological Background Affecting Injury in an Injury Prone Athlete: A Case Study

Koh YOSHIMURA

Physical Education Laboratory, Hakodate College, Hokkaido University of Education
Hakodate 040

Abstract

This case study reports the psychological background of an injury-prone athlete. A Physical Education student, seriously injured in sporting activities on several occasions in the past, was examined using Rorshach Test. As a result, the psychological traits affecting injury were identified as follows:

- 1) a low emotional locus of control, and behavioral hyperactivity.
- 2) immaturity in close interpersonal relationships because of the lack of emotional depth based on the denial, repression, or underdevelopment of the need for affection.

Given the subject's self-reported case history, a potentially new explanation of Injury Prone Athlete would now appear possible.

はじめに

競技スポーツ選手にとって怪我は重大なテーマであり、怪我の程度によっては、競技からの離脱を余儀なくされることもある。また、スポーツ選手のバーンアウトの発生機序として、怪我の要因がとりあげられており¹⁾、怪我が関与している症例も見受けられる²⁾。したがって、競技者ならびに指導者は、怪我をいかに予防し、いかに回復させるかということにも十分に注意を払って、練習や指導に取り組まなければならない。スポーツ選手の怪我に関しては、近年、特に整形外科的立場からの予防及び治療に関する研究が進んでおり、同時にその技術が向上している。心理学的立場からは、性格的要因、負傷時の情緒反応、心理的リハビリテーション等に関して、諸外国では研究報

告が行われているが^{3),4),5)}、日本ではほとんど行われていないのが現状である。

負傷した選手にとっての心理的な関心は、1) 怪我の心理的発生原因、2) 怪我に対する競技者の情緒的反応の変容、3) 心理的リハビリテーションの促進、4) 競技復帰時期の決定、といった観点があげられる⁵⁾。2) に関して上向ら⁶⁾は、スポーツ選手にとっての負傷を一時的対象喪失と捉え、Kubler-Ross (1969) の臨死5段階モデル⁷⁾によって、情緒的反応の変容への検討を試みている。しかし、その他の観点での研究はほとんど行われていない。特に怪我の心理的発生原因に関する研究が未発達な背景には、怪我を物理的偶発事象と捉える傾向が強いこと、怪我の原因を単に不注意あるいは緊張感の欠如といった要因に決めつけてしまうこと、さらには負傷した選手の調査研究が容易ではないこと等が考えられる。

本研究で対象とされた事例Sは、1ヶ月以上も競技を停止しなければならないような大きな怪我を度々被った、いわゆる負傷頻発選手 (injury prone athlete) であると思われた。上述のように、スポーツ選手にとって、怪我による心理的・身体的ダメージは大きく、Sにとっても怪我を予防することへの意識は高いものと思われる。しかしながら、S自身や指導者も、負傷頻度の多さを認識してはいるが、怪我に起因する要因が不明確であるため、的確な予防手段を見つけ、それに注意し、あるいは指導するまでには至っていない。そこで本研究では、事例Sの心理的特徴を探り、その特徴から怪我に関与していると思われる心理的原因を検討することを目的とした。負傷頻発選手に、怪我をもたらす何らかの心理的な法則性を見出すことができれば、今後Sが怪我を予防していく上での心理学的立場からのアドバイスを与えることができる。また本研究は、怪我にかかわる心理的背景を、今後さらに検討していく上での基礎資料を提供することになる。

なお、本研究は目的ならびに公表に関し、Sの承諾を得て行ったものである。

事例Sの紹介

SはH大学体育科の男子学生であり、ハンドボール部に所属している。Sは幼少年時代からスポーツを好み、小学5、6年の時にスポーツ少年団で野球を行っていた。中学校に入学すると、体育系の野球部かバスケットボール部への入部を希望していたようであるが、あるクラブの先輩からの勧誘を断りきれず、文科系のクラブに入部した。その後、高校2年生まで継続してそのクラブを行っていた。Sはその間、遊びの中で運動を行っていたが、高校3年生の時には運動への欲求が高まり、ハンドボール部に入部した。大学受験に際し、Sはスポーツをしたいという動機づけによってH大学体育科を受験した。大学での部活動に関しては、「体育科なので運動系の部活動をやらなければいけない」と述べていることから、とりわけ積極的にその競技をすることを望んで入部したのではないようであった。しかし大学4年間ハンドボールを続け、北海道大学選手権1部リーグで3位、北海道地区大会3位の戦績を修めている。平成4年10月、Sは体育の授業中に、相手プレーヤーとの接触により右足脛骨を骨折した。負傷後、Sの指導教官および友人の話から、Sがこれまでに何度も怪我をしていたことが判明し、負傷頻発選手である可能性が考えられた。Sは大学に入るまでは大きな怪我はしていなかったようであるが、大学生活の4年間で表1に示すように、7回もの負傷を繰り返していた。そこでSに本調査の主旨を説明したところ、了解を得ることができた。

表1 事例Sの負傷歴

負傷した時期	症 状	状 況 ・ 備 考
H. 1年10月 (大学1年生)	右足首捻挫 ギブス2週間、全治1ヶ月	学内スポーツ大会 種目がSの専門とする競技であり、責任感を感じ、より積極的にプレー
H. 1年10月 (大学1年生)	左足首捻挫 ギブス2週間、全治1ヶ月	学内スポーツ大会の翌日のコンパ 転倒
H. 2年3月 (大学1年生)	左足首捻挫 ギブス2週間、全治1ヶ月	部活動中 2ヶ月後、北海道大学選手権(不参加) 翌日、自動車の仮免許試験
H. 2年7月 (大学2年生)	左手首舟状骨亀裂骨折 ギブス3週間	部活動中 1週間後、市内大会(テーピングをして 出場)
H. 3年3月 (大学2年生)	左足首捻挫 ギブス2週間、全治1ヶ月	部活動中 2ヶ月後、北海道大学選手権(不参加) 上級生に対する不満
H. 3年12月 (大学3年生)	左足首捻挫 シーネ(固定器具)3週間	部活動中 1ヶ月後、北海道一般大会(不参加)
H. 4年10月 (大学4年生)	右足脛骨骨折 手術、全治4ヶ月	体育の授業中 翌日、“遊び”が計画されており、うきう きした気分でかなりハッスル

調 査 方 法

1) ロールシャッハ・テスト

Sの心理的特徴を調べるために、ロールシャッハ・テスト(以下では、ロ・テストとする)を施行した^{8),9)}。ロ・テストは人格の深層で働いている意識されない動機と現実行動との力学的因果関係や人格機能を測定するものと言われており、怪我に至る心理的特徴への理解を深めるために適していると思われた。なお、ロ・テストの施行は片口法⁸⁾に従ってスコアリング、ならびに分析が行われた。

2) 面接調査

これまでにSが被った7回の負傷における状況、およびその前後の心理状態に関する情報を収集するために、Sとの間に2回の面接がもたれた。

結 果 と 考 察

1) 形式分析

ここではロ・テストの形式分析からSの性格特徴を探った。そしてその特徴と面接調査で得られ

た負傷前後の心理状態、及び経歴との情報を照らし合わせながら、怪我に関与していると思われる心理的原因の検討を行った。表2にはロ・テストでのSのプロトコルを、図1にはSと正常成人の平均のサイコグラム¹⁰⁾が示してある。

表2 事例Sのロールシャッハ・プロトカル

<p>I 3" ① 枯れ葉。全体、まわりがボロボロになっている、カエデのような感じ。 W F ± P I</p> <p>② 動物、キツネ。耳、口、目、目は下の方、上の方は眉毛というわけではないけど。 W, S F ± Ad</p> <p>③ 翼のついたような人が2人向き合っている。頭、手、胴体、翼、2人が向き合っているような感じ。 W M ± (H) 33"</p> <p>II 9" ① 犬のような。目、鼻、耳、ブルドック系の犬。鼻血を出しているような。 D F ± CF, m Ad, Blood</p> <p>② 赤いのが血に見える。この上の赤いのが、赤いのと垂れているような、イメージ的に形が。 D CF, m Blood 40"</p> <p>III 3" ① 人が2人向き合っている、手に何か持って。顔、足、手、これが物ですね。 D M ± H P</p> <p>② 動物、正面からの顔、何と言うわけじゃないけど。目、鼻、耳か角、これを入れればこれが角になって、ウシのようにも見える。これがリボン、リボン付けているウシのような。 W F ±, FC Ad, Cg</p> <p>③ 赤いのが気になってしまう、血のような。黒より赤の方が頭に飛び込んでくる、タラーとしたり落ちるような。 D CF, m Blood 45"</p> <p>IV 14" ① ウシのような。目、鼻から口にかけて、耳が垂れ下がっているのがウシの顔に似ている。 D F ± Ad</p> <p>② 暗闇のような。森の奥深くで、薄いところとまだらなところ、この垂れ下がったのが不気味な感じ。 W K, m Darkness 38"</p> <p>V 2" ① 羽のついたチョウのような生き物。羽、触角、しっぽ、羽を下ろした状態。 W F ± A P</p> <p>② 山のようにも見える。これが山、この形が、これが邪魔になったけど、これがなければ富士山みたいなきれいな形。 W F ± Na 35"</p>	<p>VI 5" ① キツネの毛皮にしたような。ヒゲ、鼻、アゴの毛、ふさふさした、手、足、平べったい平面的に見えた。 W F ± Aobj P</p> <p>② 葉っぱのような。カエデというかモミジ、逆に見たら上が茎というか、等間隔で正五角形。 W F ± P I</p> <p>③ 弦楽器というかそういう感じ。これがチューニングするねじ、弦がとび出している、柄の部分。 W F ± Music 40"</p> <p>VII 2" ① 子供が2人向き合っているような。顔、鼻、口、頭、これはいらぬですね。 D M ± Hd</p> <p>② ウサギが2ひき。耳、しっぽ、顔、外側を向いている。 D FM ± A 32"</p> <p>VIII 18" ① 炎が燃えているような暖かい感じ。下の部分が火の元、その上が炎、色で。 D CF, m Fire</p> <p>② 幼稚園時代を思い出すような。絵の具を画用紙に垂らしてそれをフーと吹いてできる図。 W CF, m Art</p> <p>③ 爬虫類のようなイグアナが両サイドにいる。顔、手、足、しっぽ、爬虫類系の顔。 D F ± A (P) 1'24"</p> <p>IX 24" ① 全体的にカラフルな壺というか陶芸品。下がしっかりしている土台、壺という類の置物。 W, S FC ± Obj</p> <p>② アイカ。目、真ん中のすじが軟骨、以上にやらしい目をしている。 dr F ± A 2'03"</p> <p>X 10" ① 小さい生き物、いろんな形の生き物がいっぱい集まっているような。竜みたいな、ワニみtainな顔が、クモ、バイキン、マンガに出てくるような、青虫、バッタ、妖精、コウロギ、色が。 W FM ±, FC A, (A), (H)</p> <p>② 真ん中を堺にして向き合っているのが何でしようね、対立しているような。これ怖い顔、目と口が、色的なものもあるのかな、青と黒が冷たい色という感じ。 D FM ±, Csym (A), Abst</p> <p>③ 赤い部分はどうしても血のようなイメージが。血が広がっているイメージ。 D CF, m Blood 2'38"</p>
<p>Summary Scoring R=25 RT(Av.)=9⁷ W:D=13:11 W%=52% Dd%=4% S%=0% W:M=13:3 M:ΣC=3:7, 25 FM+m:Fc+c+C''=6, 5:0 VIII+IX+X/R=32% FC:CF+C=2:6 FC+CF+C:Fc+c+C''=8:0 M:FM=3:3 F%/ΣF%=48%/76% F+%/ΣF+%/R+%=75%/79%/60% H%/A%=12%/40% P=3.5%(14%) CR=12 DR=6</p>	

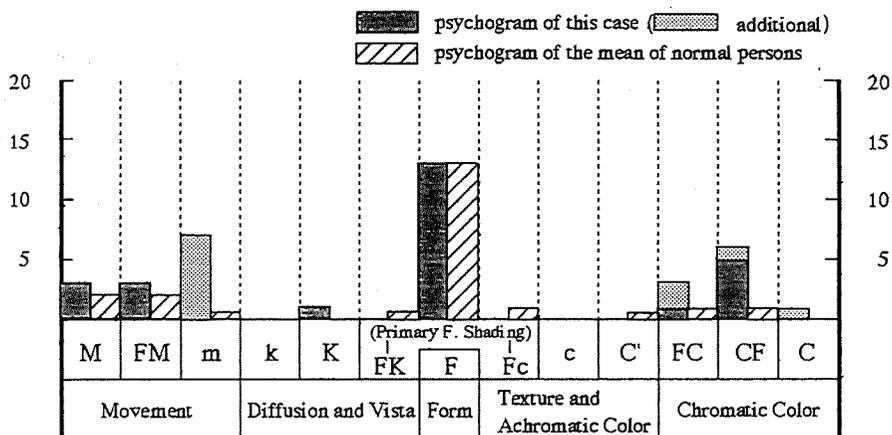


図1 事例Sおよび正常成人の平均サイコグラム

・ $R=25$, $R_1T=9''$ と防衛的なところは感じられない。これはラポールの形成が容易に行われたことや、Sとの間にもたれた面接を通して伺えることであった。

・ AVNCとAVCCとは、 $5''$ と $13''$ でAVCCがAVNCの2倍以上遅れており、カラーショックがあったことが伺える。これは特にカードⅧ, Ⅸ, Xの遅れが目立ち、多くの外的刺激に対して困惑している様子が伺える。

・ W : Dは把握型を示す指標であり、この比率が $13 : 11$ ($W < 2D$) と知的側面での統合力が弱く、むしろものごとを現実的に具体的に処理していくタイプだと考えられる。

・ $R=25$, $\Sigma F + \% = 76\%$ と、知的生産力も知的能力も共に普通程度と考えられる。しかし $W : M = 13 : 3$ ($W > 3M$) であり、パーソナリティの資質を越えた過度に高い要求水準が感じられる。

・ 体験型は、 $M : \Sigma C = 3 : 7.25$ と外拡型であり、特に $M < 1/2 \Sigma C$ と極端な色彩型であることから、情緒が不安定で自己の感情を外部に表出し、衝動的な行動に走りがちであることが伺える。また、血液反応が3個 (12%) も示されており、強い情緒的反応が統制されず、衝動性や攻撃性が現われることも予想される。しかし $FM + m : Fc + c + C' = 6.5 : 0$ であり、内部では葛藤と矛盾が存在するのかもしれない。平成3年3月に起きた左足首捻挫は、部活動中の負傷であった。この時期Sは上級生との折り合いが悪く、上級生の示す練習方法、あるいは人間関係に不満を抱いていたようであった。そして負傷以前には上級生に対して、反抗的態度を示していたようであった。この時期のSの心理的狀態を推察すると、情動的不安定さ→統制の困難さ→衝動的行動、という一連の心理狀態が特徴として考えられる。

・ $FC : CF + C$ は外的環境の情緒的刺激に対する反応性の程度を表す指標であり、この比率が $2.0 : 6.0$ ($FC < CF + C$) と情緒に対する統制力の乏しさが感じられる。平成4年10月に起きた右足脛骨骨折は、教養(一般)体育の授業中での怪我であり、その時のSはかなりのハッスルプレーを行っていたようであった。Sが体育科の学生であり、教養体育では体育科以外の学生が多く含まれていることを考慮すると、Sのその時の行動には通常ではない不自然さを感じる。面接調査においてSは、「翌日遊びの計画を立てており、うきうきしてかなりハッスルしていた。」と述べている。また平成2年3月に起きた左足首捻挫は、その翌日が自動車の仮免許試験であり、部活動の開始まで多少興奮していたようであった。さらに、平成1年10月に起きた右足首捻挫は、学内スポー

ツ大会^{註1)}での負傷であった。この時の種目は、Sの所属するクラブ種目と同じハンドボールであり、Sはチームに対する責任感を抱き、かなりのハッスルプレーをしていたようであった。したがって、これらのことから、Sにおいては、ある状況での情緒的興奮に対する統制力を失った行動が、怪我に關与する要因として考えられる。

・FC:CF+C:Fc+c+C' は情緒の性質を示す指標であり、この比率が8.0:0 (FC+CF+C>2(Fc+c+C'))と情緒を行動に現しがちな衝動表出(acting out)の可能性が感じられ、承認や愛情への欲求を感じる事が比較的少ないと思われる^{註1)}。また愛情欲求の構造に関する比率をみると、(FK+Fc):F=0:12(4(FK+Fc)<F)であり、愛情欲求の拒否、抑圧、あるいは未発達を考えることができる。さらに、H%=12%とやや低く、対人関係での未成熟性や鈍感さなどが多少伺える。これらに関しては、継列分析においてさらに検討することになる。

・M:FMは内的資質と衝動的活動を示す指標であり、この比が3:3と比率的には問題はなく、内的価値観と衝動とに葛藤はないと思われる。しかしmが3.5も示されており、人格の統合を脅かす緊張が強すぎるために、内的資質を有効に利用できないことが考えられる。

2) 継列分析

継列分析では、記号による客観的・数量的な解釈にとどまらず、10枚の図版に対して与えられた反応を、時間的な流れのうちに、各図版の特性を考慮しつつ、力動的解釈を試みることになる(片口^{註9)}215頁)。

・カードI:R₁Tが早く、形態水準も良好であるが、まず“枯れ葉(まわりがボロボロになっている)”という反応を出したことは、現在怪我をしている自己の心理状態が反映され、その情緒的側面が投影されたものと予想される。その後、“動物の顔”(F±)、さらにはM±反応を素早く出し、回復力を感じさせるが、P反応は出していない。

・カードII:カードIと比べ、R₁Tが遅れている。まず、“犬の顔”という反応によって安定をはかっているが、赤い部分が気になっているようである。Inquiryの段階で、犬の顔と赤い部分を結び付けている。Blood反応をその後、カードIIIとカードXでも出しており、レッドショックが伺え、赤色の刺激に対する情動的な困惑が感じられる。

・カードIII:M反応を即座に出していることから、情動的な動揺からは回復しているように思われる。しかし次の“動物の顔”ではやはり赤い部分が気になり、切り離しの不適切さのため、形態水準を下げている。そして再びBlood反応を示しており、レッドショックがかなり強いと思われる。

・カードIV:R₁Tが再び遅れている。“ウシの顔”を示すことにより安定をはかっているようだが、次にK反応を出しており、暗黒ショックがみられる。一般にK反応は、愛情欲求にもとづく漠然とした不安感に關係しており、この反応を示す人は、不安を感じながら、それに対して防衛を確立し得ないか、あるいはその防衛に失敗していると考えられている(片口^{註9)}187頁)。

・カードV:素早くP反応を出しており、カードIVのショックからの回復が早いようである。

・カードVI:“キツネの毛皮”という陰影反応を伺わせたが、Inquiryの段階では陰影については示さず、カード全般においても全くみられなかった。陰影反応は、自我機能の健全な発達の基本となる安全感、およびそれと対極をなす不安の問題を反映していると言われている^{註2)}。面接調査の中でSは「自分は目立ちたがり野で、一人でいるのが絶対に嫌だ。」と述べており、またカードIVでK反応が示されたことから、基本的な安全感に欠け、愛情欲求にもとづく不安感が存在するものと思われる。さらにSの友人は「Sに対してはいつも相手にしていないとすねてしまう。」と述べていることから、Sは表面的には承認、愛情欲求を現しているようだが、愛情欲求の抑制あるいは未発達さのため、情動的な深まりに欠けるものと考えられる。したがって、対人関係が未熟

であるために、人間関係に支障をきたした場合、情緒的な統制が困難であるが故に、行動面での問題が予想される。本面接調査で得られた情報だけでは、このような心理的背景がSの負傷にいかに関与しているかを検討するには十分ではない。しかし、平成3年3月に起きた怪我は、負傷前の状況として対上級生とのトラブルが生じていたことが参考としてあげられる。

・カードⅦ：M反応を示してはいるがHdであり、D₅の統合に失敗している。カード全般をとおして、 $H < Hd + (H)$ であり、成熟した人間関係にやや劣るものと思われる。

・カードⅧ：この種の赤色に対しては、炎を“暖かい感じ”と示しており、ネガティブなイメージは薄らいでいる。しかし、R₁Tの遅れ、①、②のCF反応、P反応級の反応が最後に示されていることから、多彩色刺激によるカラーショックが生じているものと思われる。

・カードⅨ：最もR₁Tが遅れ、困惑している様子が伺える。まずFC±を示したことから、ある程度の対処能力を有すると思われたが、②では感情移入が生じて形態水準を下げている。

・カードⅩ：このカードをMost Liked Cardとして選び、同時にSelf-image Cardとしても選んでいる。①では明るくにぎやかな様子を示しているが、②では“対立”を表現し、さらに③でBlood反応を示していることから、対人関係に問題を抱えているのかもしれない。

まとめと今後の課題

本研究では、負傷頻発選手の可能性が考えられた事例Sについて、ロ・テストによってその性格的特徴が調査され、Sがこれまでに被った負傷にかかわる心理的背景が検討された。その結果、Sの負傷に関与していると思われる心理的特徴として、情緒的に不安定で、自己の感情を外部に表出し、統制力に欠けた衝動的な行動に走る傾向が強いことが考えられた。また、基本的な安全感に欠け、感情欲求の抑制、あるいは未発達さのため、情動的な深まりが少なく、対人関係が未熟であるものと思われた。そのため、対人関係がスムーズに行われない場合、情緒的な統制が困難であるために、高い衝動性や攻撃性が現われ、競技場面を含んだ行動面での問題が予想された。

これらのことを踏まえ、Sがスポーツ活動において怪我を予防するために、心理学的立場からいかなる指導を行うことが有効か、今後の課題となってくる。そして負傷にかかわる心理的背景をさらに検討するためにも、事例研究を積み重ねることが要求される。

注

1) 学内スポーツ大会は、2日間にわたりH大学体育科の学生で行われる大会であり、学年対抗でバレーボール、バスケットボール、ハンドボールの競技種目を行うものである。体育科の学生だけであること、学年対抗であることから、大会は相当盛り上がったものとなる。ハンドボールはSの専門とする競技であり、面接調査から、Sはかなりハッスルしたプレーをしていたものと予想された。

2) 図2は、自我機能の発達の図式である。Klopper¹²⁾によると、自我が健全な発達をとげるためには、基本的な安全感を必要とする。そしてロ・テストにおいて、それを最も反映するものとして陰影反応をあげている。これは、陰影の感じが一種の“接触感”を引き起こし、その接触感が人間の基本的な情緒の安全感への欲求を刺激するという点に基づいている¹¹⁾。

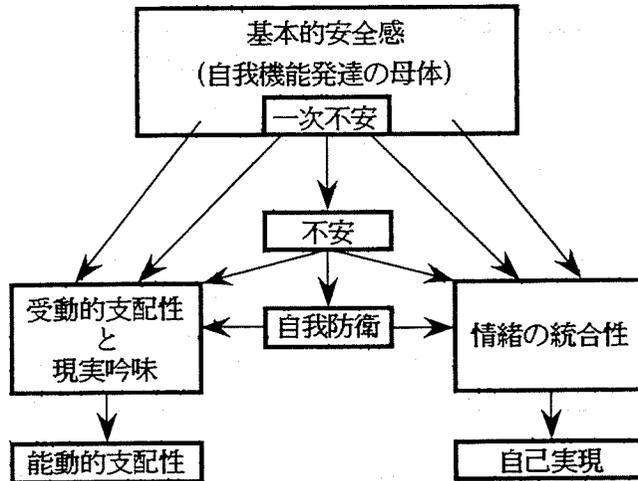


図2 自我機能の発達 (Klopfers : 1954)

引用・参考文献

- 1) 岸 順治・中込四郎, 1989, 運動選手のバーンアウト症候群に関する概念規定への試み, 体育学研究, 34-3, 235~243
- 2) 中込四郎・岸 順治, 1991, 運動選手のバーンアウト発症機序に関する事例研究, 体育学研究, 35-4, 313~323
- 3) Hanson, S. J. and McCullagh, P., 1992, The Relationship of Personality Characteristics, Life Stress, and Coping Resources to Athletic Injury, *Journal of Sport & Exercise Psychology*, 14, 262~272
- 4) Smith, A. M., Scott, S. G., O'Fallon, W. M. and Young, M. L., 1990, Emotional Responses of Athletes to Injury, *Mayo Clinic Proceedings*, 65, 38~50
- 5) Wiese, D. M. and Wiese, M. R., 1987, Psychological Rehabilitation and Physical Injury: Implications for the Sportsmedicine Team, *The Sport Psychologist*, 1, 318~330
- 6) 上向貫志・中込四郎, 1992, スポーツ選手の負傷に対する情緒的反応とその変容, 日本体育学会第43回大会号, 204
- 7) キューブラ・ロス (川口正吉訳), 死ぬ瞬間, 読売出版社, 東京 (1971) (Kubler-Ross, E., 1969, *On death and dying*, Macmillan, New York)
- 8) 片口安史, 新・心理診断法, 金子書房, 東京 (1974)
- 9) 岡堂哲雄・矢吹省司, ロールシャッハテスト入門, 日本分化科学社, 東京 (1976)
- 10) 村上宣寛・村上千恵子, なぞときロールシャッハ, 学芸図書株式会社, 東京 (1988)
- 11) 河合隼雄, 臨床場面におけるロールシャッハ法, 岩崎学術出版社, 東京 (1969) p.60~61, p.82~83
- 12) Klopfers, B., Ainsworth, M. C., Klopfers, W. G. and Helt, R. B., 1954, *Developments in the Rorschach technique, Vol. I*, World Book, New York